「県民と県議会との意見交換会」　滝沢市会場　の概要

〔日　時〕　令和５年４月27日（木）13：00～15：08
〔場　所〕　滝沢ふるさと交流館ホール
〔テーマ〕　働きながら安心して子どもを生み育てられる環境づくりについて
〔参加者〕　（６名）
畠　山　いずみ（株式会社北日本銀行　人事部調査役）
宮　野　亜由美（花っ娘　代表）
川　原　枝　里（株式会社ミクニ盛岡事業所　コーポレート本部人事総務室
盛岡人事総務グループ）
佐々木　恵　美（株式会社航和　総務担当）
鈴　木　千枝子（医療法人潤心会　理事長）
楢　木　美　佳（ハローワーク盛岡　菜園庁舎マザーズコーナー
就職支援ナビゲーター）
〔出席議員〕（９名）
米内紘正議員（座長）、軽石義則議員、名須川晋議員、柳村一議員、高橋こうすけ議員、
髙橋但馬議員、吉田敬子議員、ハクセル美穂子議員、小林正信議員
〔オブザーバー議員〕（１名）
臼澤勉議員

◆　参加者自己紹介及び現在の活動状況等について

○畠山さん

当行はユニークバンクとして、故郷“いわて東北”をもっと豊かにおもしろくするため、地域の皆様に利用したい、大切な人に紹介したいと思われるような存在を目指して活動をしている。

私は人事部として、女性活躍をはじめとするダイバーシティ推進、働き方について取り組んでいる。例えば育児の部分でいうと、パパママサポートガイドというものを行内のプロジェクトチームで作成して周知したり、育児支援や復職支援、育児中の職員やそうでない職員についても、多種多様な働き方を提供できるように行内で協力して検討している。

○宮野さん

私のところでは安代りんどうを栽培しており、パート８名を雇用している。全員女性、平均年齢は 40 歳から 45 歳くらいで、もちろん全員子育て中である。

他と何が違うかと言われると、働きやすさや理解など、女性の視点であれば、私達もどこでもやってないような点があるのではないかと思う。

○川原さん

小学校５年生と小学校２年生、もうすぐ２歳になる子どもが３人いる。弊社には５年ほど前に中途入社し、給与と勤怠などを担当している。その前は９年半、ほかの会社で働いていた。

○佐々木さん

弊社は雫石町と盛岡市で介護施設と介護事業所を運営しており、職員は 80 名ほどである。介護事業所はどうしてもシフト勤務になるので、子育てをしながら勤務している 30 代から 40 代の女性職員が中心となっている。子どもの都合でお休みしなければならないので、シフトで勤務して

いると休みが取りづらいということが結構あったが、弊社では子育て中の職員のことを理解して、休みを取りやすい職場を目指している。

私自身も小学校５年生の娘がおり、まさに子育て中である。娘が１歳になった時に仕事を始めたので、ずっと子育てをしながら仕事をしている。弊社の管理者は私１人だが、女性が子育てのために仕事ができないということがないような、ほかの職員が管理者として活躍できるような職場を目指して取り組んでいる。

○鈴木さん

神の前歯科医院は私が昭和 58 年に開設したので、40 年歯医者をしている。その間に、子どもを３人もうけ、30 歳、33 歳のときに女の子、36 歳で男の子を出産し、出産前日まで仕事をし、出産後１か月で仕事に復帰していた。それは、私が歯科医師であって経済力があるので、お手伝いをしてくださる方を雇用できたのである。開業したときはスタッフ３名から始まっており、歯科衛生士、歯科助手、歯科技工士、受付など、各職制の人たちは仕事のスキルが上がってきたときに、結婚、出産、退社を繰り返しているのを見てきた。

10 年くらい前、自分は子どもがいたためにほとんど歯科衛生士としての実務がない、神の前歯科医院でそれを勉強したいから勤務させてほしい、という盛岡から来た歯科衛生士がいた。その方は、子どもを保育園に預け、ちょっと熱があると、病児保育に預け、そして出勤していた。そういうことをずっと見てきて、うちのスタッフはみんな女性だから、これを何とかしなければ自分の企業としての将来性も危ないと考え、事業所内託児所として神の前託児の森マムズフォレストを平成 29 年につくった。

○楢木さん

私は令和４年４月からマザーズコーナーで、仕事と家庭の両立を目指す方に対する就職支援を担当している。支援内容としては、職業相談、仕事の紹介、履歴書・職務経歴書の作成支援、模擬面接、面接練習などを行っている。また、就職活動に役立つセミナーを行っており、お子様同伴も可能なセミナーで、昨年度は毎月１回開催し、講師を担当した。今年１月からＬＩＮＥ配信も行っており、セミナーの情報や仕事と子育てが両立しやすい求人一覧を配信している。

マザーズコーナーは、ゆったりとした空間でベビーカーごとお入りいただける。お子様が誤って外に出ないように、入口の扉に配慮している。求人検索機のほか、ベビーベッドやおもちゃ、授乳室、おむつ交換台を用意している。保育士資格、経験がある安全サポートスタッフがおり、お子様と一緒に遊んだり、抱っこしてあやしたりして見守りをしているので、お子様連れでも安心して利用いただける施設となっている。求人検索機を利用している時や、職業相談をしている時に、お子様がキッズコーナーで遊ぶことができるので、ゆっくり落ち着いて相談ができる。相談が終わって帰ろうとすると、お子様がもっと遊びたい、帰りたくないと言うこともある。

仕事と育児の両立を考えるときに、子どもがまだ小さいので当面はパートで働きたい、子どもは小さいけれども家族のサポートがあるのでフルタイムで働きたい、パートとフルタイムのどちらがいいか、今すぐは無理だが再就職の準備をしたいなど、人それぞれ状況、希望があるかと思うが、マザーズコーナーでは相談者の状況、希望条件などを丁寧に伺いながら、希望の仕事につけるよう支援している。

◆　意見交換

○ハクセル美穂子議員

ここにおられる皆様方が働きながら子育てしてきた中で、大変だったことや、今はそれが改善されているのか、それともそういった悩みを持っている職員の方々がまだおられるのかなど、教

えていただきたい。

〔回答：楢木さん〕

窓口で相談されることだが、子どもの急病や学校行事で休むことは可能か事業所に聞いてほしい、少人数体制の会社だと休みにくいのではないか、子育ての理解があるところを希望するなどの相談や、本当は正社員やフルタイムで働きたいが、子どもが小さいので病気で休みを取ることになり、パートに比べてより責任感を感じるのでフルタイムに応募することを躊躇するという相談を受けることはよくある。

また、子どもを預けるために保育所を探すのと、仕事を探すのと、どちらを優先して探せばいいかなどの相談を受けることがある。

〔回答：鈴木さん〕

まさにそのテーマで、マムズフォレストを設立した。先ほど申し上げたように、歯科医院に限らず、仕事というのはスキルがどんどん上がってきて、男性でも女性でも同じ仕事をするともっとスキルが上がってくる。男性は仕事を続けられるのに、女性は出産、子育てで中断しなければならない。それが日本の間違いである。北欧は全然そうではなく、男性でも女性でも同じように育休も取れるし、交互に仕事を休みながらできる。そういうことを日本でもできれば大丈夫なのに、子育ては女性の仕事という考え方がはびこっていることに違和感を感じる。

私は、主人が 45 歳で亡くなり、その保険金をどう使おうかと考えた。その時は普通のユニット５台の歯医者をやっており、子どもは高三、中三、小六だった。開業自体は私がして、主人は岩手医科大学の先生だったが、大学の仕事ができなくなり、当医院で一緒に働くようになった。これからの歯医者の仕事のビジョンは、ただ単に削って治してということではない。健康のために、虫歯もつくらない、歯周病も進まない、無呼吸症候群にもさせず、鼻呼吸をちゃんとできるような口腔からの健康を守る歯科医師になりたいと２人で話していた。それで主人が亡くなった後それを具現化するために、今の歯科医院を平成 18 年に建てた。

この後、赤ちゃんから、またはマイナス１歳からの予防ができるキッズデンタルパークという歯科医院を平成 25 年につくった。先ほど申し上げたように、職員がふえていく中で、予防を学びたいけれども、子どもがいるので働けないという職員と出会い、本当に胸が痛んだ。結局その職員は、当医院を退職して岩手医科大学の歯科衛生士になったのだが、つわりが辛いといって退職する職員がでるといつも胸が痛んだ。これを何とかするため、たまたま敷地もあったので託児所をつくろうと思った。企業内託児所の補助金があることを矢巾町役場で教えてもらい、それも申請した。初めから福利厚生で職員からお金をもらわないでやろうと思って始めた事業だった。

たまたま、先週２回ほど取材に来ていただき、一昨日、ＩＢＣのニュースエコーで取り上げられた。キャスターの方の最後のコメントで、子どもに優しく、子どもにもよく、女性にもよい、そのことをずっと突き詰めていけば、企業の未来もそれで開ける、と言っていたが、それはまさに私が望んでいたことであった。

当院は、若く、入ったばかりの人がやめることはあるけれども、出産や育休後の復職ありきで皆さんやめずに働いている。例えば、歯科衛生士が１人休職した場合、彼女が持っている患者さんは他の歯科衛生士が担当して、その部屋のアポイントは取らない。ほかの職員に負担過重にならないように考えるのも、私の仕事かと思っている。そのおかげで、スタッフもやめることがない。将来についても考えられる。

子育ては女性の仕事という話に戻るが、女性が子育てをするという考え方自体がちょっと日本的すぎて、違うのではないかと思う。私の娘もキッズデンタルパークの院長をしているが、私も娘も、男だ、女だという感覚がもうないので、そういう点では、そこを改善すれば普通に子どもがふ

えるのではないかと思っている。

〔回答：佐々木さん〕

私自身も子どもが１歳になってから仕事を始めたので、育児と仕事の両立は本当に大変だった。仕事が終わったら家に帰って、子どもの迎えに行って、ご飯をつくって、寝たらまた朝起きてご飯をつくってという毎日同じことの繰り返しだったので、すごく大変だった。

子育て中の職員で、兄弟の１人が風邪を引くと、続けて、２人目も風邪を引くのでずっと職場に来られないことなどもあり、職員の体調面、子どもだけではなくお母さんの体調面も心配し、まめに声掛けをしてフォローしている。

仕事上では、休む場合は周りの職員がフォローしたり、休みをかわるなど、職員が休めるような環境づくりや、残業しないよう定時で帰ってもらうなどの取り組みをしている。経験しているからこそわかることなので、当事者の職員の声を聞きながら、企業自身も理解しながら、周りも理解しながら、ということが大事ではないかと思っている。

〔回答：川原さん〕

私は現在、16 時までの時短勤務で働いているが、前の職場では時短勤務で働いている人が周りにいなかったので、復帰後もフルタイムで働くことが普通だと思っていた。当時は若く、知識もなく、教えてくれる人もいなかったので、とにかく大変だった。弊社に入ってからは有給を取りやすくなった。理由としては上司が頻繁に有給を取っていたためである。会社の上の立場の人たちが積極的に休んで、下の人が休みやすい環境をつくるといいと思う。

昨年５月に３人目の育休から復帰し、時短勤務にした。若い職員は時短勤務の制度があることを知らない人が多い。試しにやってみようという気持ちで 16 時までの時短勤務にしたが、１時間早く上がるだけでも心にも時間にも余裕があり、実際にしてみてよかったと思っている。

〔回答：宮野さん〕

私のところのパートは、全員まだ小学生の子育て中である。よく言われるのは、仕事中に子どもが熱を出した、お腹が痛いと学校から電話があり、すぐに帰りたいけれども、一緒に働いている人たちにものすごい気を遣う、ということである。私は、息子が３歳のときにパートとして入ったが、人数が少ないところだったので、子どもが熱を出したので休みますと当日に言うと、どうして休むのかと、まずこの言葉が先に出てきた。それがとても嫌で、何軒か雇ってもらったが、ほぼ全ての職場でそう言われてきた。

私自身もそういう経験をし、子育てをしながら仕事をすることは本当に大変だと思っていたが、外で働きたいとも思っていた。うちは旦那が自営建築業で、私は家におり、子育てでやることはいっぱいあるけれども、子育てをしながらも何かしたい、何か自分でできる仕事はないかと八幡平市役所に駆け込んだ。私自身が経営者となり仕事ができないかと相談したところ、りんどうとほうれん草の農業を勧められた。農業だったら自由に時間が使えるし、子育ても自由にできるかもしれない、という本当に甘い考えでこの世界に入った。食べ物は農薬関係があるので責任が取りづらいため、りんどうなら何とかできるのではないかと始めたが、これが本当に大変だった。私は生まれた時から農業に携わってきて、この世界だけには絶対に入りたくないと心に決めていたが、なぜか農業という職業を選んでしまい、本当に後悔した。後悔したが、苦ではなかった。なぜかというと、子どもと一緒にいれたからである。

その後、どんどん生産をふやすことになり、パートを雇うことになった。最初に雇ったお母さんから、子育てをしていて今まで仕事に出たことがないし、人にかかわることがなく、一歩踏み出す勇気がないと言われた。全然大丈夫だよ、１時間からでもいいから慣れるためにやってみてと告

げると、そのお母さんは勇気を出してうちに来てくれ、本当に１時間で帰った。それでもいいのだという考えから、うちは１時間でもいいので仕事に来てください、子どものことで急用ができた場合はすぐ帰ってくださいと言っている。

また、パート一人ひとりを管理することが大変なため、自分の給料を決めてもらっている。自分の給料は自分で決めてください、私はお金を払いますからということで、自分の好きな時間、働ける時間に働いてくださいと言って、それが口コミで広がってしまい、20 名ほど働きたいと言われたが、私の経営状況もあり何人かお断りした。

周りが子育てを理解し、働ける環境を整えていかないと、女性が働くことはないような気がしている。私も最初は口任せで簡単に言ってしまったが、当初からの８名のパートは、現在８年目となり、誰もやめていない。そのため、環境づくりが大事なのだとすごく実感している。自分たちの給料は自分たちで決めてもらい、休みたいときは休んでもらい、忙しい時期は忙しいことを伝え、コミュニケーションを取りながら、環境づくりをしている結果として今があるのかなと思っている。

以前勤めていた会社でよく言われた、もう帰るのかという言葉は、できれば女性のために排除していただきたい。経営者側が、パートで働く人たち、女性だけでなく地域の人たちから意見をいろいろ聞きながら、環境を直さなければならないのではないかと思っている。

〔回答：畠山さん〕

私自身は結婚や出産の経験がないため、これまで聞いてきた周りの方の話になるが、今までの話にもあったように、周りは休んでいいよと言ってくれるものの、自分が休んだ時に周りに負担をかけていることへの後ろめたさを感じている人が多い。自分は仕事ができるけれども帰らざるを得ない状態となり、精神的な負担があるため、仕事を続けようか迷うというように両立に悩んでいる人がいる。子どもは体調を崩しやすいので早く帰ったり、休んだりすることは仕方のないことだが、周りはあまり休んでいない一方で、自分の休みをフォローしてもらうことを気にしていた。

今は意識が変わってきているが、自身があまり育児参加できなかった人や、経験がない人などはサポートの仕方がわからず、フォローに迷う場面があるようだ。休まず毎日出勤して遅くまで働く意識が強い方もまだいる。徐々にその意識が変わり、育児をしながら働く人もふえてきた。先ほど宮野さんも話していたが、周りの環境や意識を変え、行動も変えていくということが大事だとすごく感じている。

日々の業務だけではなく、育児休業中はどうしてもその人のキャリア形成が中断してしまう。育児中は家庭内で大切な時間や経験を積み重ねているが、職場復帰すると同期の男性は社内でのキャリアを積み重ねている。同期と比べて経験が少ないが年齢を重ねていることに引け目を感じたり、このままでいいのかと悩んでいる方もいる。キャリア展開の仕方や、復帰後自分なりにどうやって経験を積んでスキルの幅を広げていくかということも今後改善が必要だと感じている。教え合う環境や、もっとシンプルな業務のあり方など、働きやすさを改善して、今後も取り組んでいけたらと考えている。

○ハクセル美穂子議員

まだまだ改善されていない点がいっぱいあり、これから進めていかなければならないところのヒントをいただいたと思う。

私は働く選択肢が自営だったのでやりくりができたが、働きながらキャリアを積み重ねていく時の葛藤など、私自身はわからない部分もあり、すごく参考になった。子育てで一度休んだ方にとっての復帰の第一歩のお話をされた方が結構多かったと思う。まだまだ制度自体も伝わっていな

いこともわかった。リスキリングというか、一歩踏み出すときに、もう少しやさしい制度があってもいい。フルタイムか、パートか、だけの選択肢ではなく、時短など多様な働き方を提示できる社会になれば、もっと男女一緒に子育てしながら働いていくという選択肢がふえていくと感じた。

○吉田敬子議員

実際にこれから男性の産休育休制度が進み、男性にもっと積極的に取っていただくことも大事だと思うが、私自身もずっと悩んでいることの一番は、家事育児の負担軽減の部分である。行政としてファミリーサポート制度が何十年も前からあるが、制度が今の時代に合っていないと思っている。先ほど鈴木先生からシッターを使われたという話があったが、都会だとベビーシッターに対する行政のサービスチケットなどがあるが、プラスで送迎や、食事のつくり置きのためチケットなどに対して議会でも提言している。

子育てはどうしても自分が最低限しなければないこともあるが、外注の選択肢をふやしていかないことにはやっていけない。男性に産休育休を取ってもらうことも１つの選択肢だが、その選択ができない環境の方、例えばシングルの方や身近に親がいない方などは、どこにも頼れるサービスがない。子育てしやすい環境は難しいと思っている。

私は、シッターも含めて家事育児のサポートサービスの選択肢に加えて、それに対する行政の支援があるといいと思っている。例えば、子どもが小さい時にあったらよかったと思うサービスについて御意見をいただきたい。畠山さんはこれからだと思うので、子育ての前の段階、例えばなかなか声に上げづらい不妊治療も含めた妊活などの休暇制度や、それに対する理解促進、妊活前の段階の健康支援の関係等、このような制度があればという御意見をいただきたい。

〔回答：畠山さん〕

県がマンガの冊子を配布していると思うが、街中に置いてあると、どこに支援機関やサービスがあるのか、頼り方などがわかると思う。不妊治療は費用や期間もかかるものであり、本人も周囲になかなか言いにくいところがあると思う。

また、地方に行けば行くほどそういった施設が少ないことは課題であると感じている。私は陸前高田市の出身であるが、盛岡市と陸前高田市の暮らしは全然違っており、施設もサービスも取り扱っている種類なども違う。地方は人が少ないのでサービスを維持していくことの難しさがあると思うが、金銭的なところ以外でも他の人がどういうことをしているのか、経験者などから話を聞けるような頼れる場所があるとよい。オンラインでの面談等も活用できれば地域の格差を少なくしていけるのではないか。身近な人だから言いやすい方もいれば、そうではない方もいるかもしれない。人それぞれだとは思うが、距離や地域にかかわらず、各種情報やサポートにアクセスしやすいことや、金銭的な支援があると嬉しいと思う。

〔回答：宮野さん〕

私は子育てがもう終わりになり、サービスを受けたいというよりは、子どもを預ける場所が欲しい。私もうちで働いている人たちも同じ意見である。17 時から 18 時くらいまで仕事はできるが、学校が 16 時や 17 時で終わってしまい、子どもを預かってもらえる場所がないためにその１時間が働けない時間となる。学校が終わった後、子どもを１時間見てくれる場所があるとよいと思っている。

近所に高校生、中学生、小学生、保育園児の甥４人がいる。どうしても 21 時まで働かなければならない時もある。母子家庭のため、どうしたら一番助かるのかと考え、私が子どもたちを迎えに行くのだが、終わる時間が全員バラバラである。私としても、もしこのお迎えがなかったら 18 時まで通して働けるので、学校が終わった後１時間でも２時間でも預けて見てもらえるところがあ

ればいいと思う。
　もう一つは、家に帰ってからの家事である。これは本当に大変で、部活が終わった 19 時くらいから夕御飯の支度と洗濯がある。洗濯だけでもなければいいのにといつも思う。３回洗濯機を回すとなると大変で、一番負担がかかっていると思う。子どもを預けている間に働く時間が取れる。うちのパートのほとんどが 16 時に終わるが、帰ってからは時間の余裕がなくなるので、早めに切り上げるよう勧めている。お母さんは帰ってから、掃除、洗濯、御飯支度をして、子どもを迎えに行って、塾に連れていって、21 時までにスポ少の迎えに行かないといけない。送迎の間に一度家に戻って、洗濯して、また迎えに行ってという、仕事以外にも夜にやることがたくさんあることがものすごく大変である。ここでお父さんなどが協力してくれればいいが、多分ないと思う。負担がどうしてもかかる部分で、サービスみたいなものが提供できる仕掛けがあれば、お母さんは楽だと思う。少しでも負担が軽くなれば、私も子育てをしているとき楽だったのかとは思う。

〔回答：川原さん〕

　ファミリーサポートセンターがあることは知っているが、利用したことはない。例えば美容院に行くとなった時に、私は実家が近いので自分の母親に頼れるが、実家が遠くて頼れる人がおらず、旦那さんも当てにできないときは本当に大変だと思う。ファミリーサポートセンターに頼むとなった時に、会ったこともない人に自分の子どもを任せられるのかという不安がある。その決断に至るまでの選択肢に入ってこないと思う。

〔回答：佐々木さん〕

　制度を知らなかったりするので、今だとラインやメールでお知らせしていただけるといいと思う。
　仕事をしていて何が大変かというと、私自身はいつも食事だった。毎日何をつくろう、でも仕事をしている時にそれを考える余裕はないので、献立メニューやつくり方など、例えば小学校の給食でもメニューはあるので、その一部のつくり方を教えてもらえたらすごくいいと思っていた。１週間分こういう献立がありますよということも、小学校だと栄養バランスもいいので教えてもらえればいいと思っている。

〔回答：鈴木さん〕

　当医院の場合は、０歳から１歳までは当医院の託児所があり、もりもり食べられる手づかみ食べ、歯医者が指導する固形からの離乳食などの食育もしている。しっかりもりもり食べられるようになったら保育園に行く。
　支援のひとつとしてはお金の面がある。子どもが高校生や大学生になると、お金がとんでもなくかかる。当医院に正社員で働きたいと戻ってきた 40 代後半の保育士によれば、小さい時はいろいろな支援があって産んでくださいと言うのだけど、高校、大学になって急にお金が大変になった、とのことだった。そこを何とかしてもらうと一番いいと思う。高校生まで無料で、大学生になったら自分が就職してからお金を返す。私自身も奨学金で大学へ行って、歯科医師になってから奨学金を返していた。
　岩手県は、人が少ないし、広い。昔だったら隣のおばさんが見てくれるという地域性があったけれど、今はそれも薄れてきている。うちの孫も今年小学校１年生で学童保育に行くようになって、きょうは学童、きょうは家へ帰るとやっているが、学童がおもしろくないようなので、その辺の充実があるとよい。学童自体も民間、保護者運営の学童、寄付で賄う学童、矢巾町のように自治体の学童などがあると思う。
　女性が活躍できるようにするためには、子どもを安心して頼めるところの充実と中学校、高校

までお金がかからないことが一番重要だと思う。高校までは授業料は無料、大学からは奨学金にして、大きくなっても全然お金の心配をせず、能力があったらどんどん大学まで行っていい、という社会になれば、子どもはどんどんふえると思う。

今、当医院では、産後の心配がない、前と同じ職制に戻れて給料も変わらない、育休取得の間に昇給する職員もいることから、家を建てる職員がすごくふえた。旦那さんの給料と自分の給料を合算して考えられると、アパート代を払うよりはローンを払った方がいい、と家を建てる。そうなるのも結局は自分の将来の給料が保障されているからである。当医院は定年があってないようなもので、働けることの安心感があることは職員にとってはいいのではないかと思っている。

〔回答：楢木さん〕

子育てしながら働く場合の保育所の問題だが、例えば盛岡市だと現在５か所あるのだが、日曜日に預かってくれる保育所が少ない状況ということである。妊娠出産育児で退職した後、今まで販売や飲食店など接客業のキャリアを長く積んで頑張ってきた方が復職する場合、日曜日は保育所が休みのため日曜祝日に休める仕事を探すことになる。今まで経験を積んできた販売や接客関係の仕事がしにくいから、全く経験のない土日休める事務職をやむなく探すという方も結構おり、日曜日に預かってくれる施設があるとよいと思う。

保育園の預ける時間も、延長保育などもあるにはあるが、早朝勤務や、遅い時間の勤務にも預けることができれば安心して働くことができると思う。ただし、延長保育や休日預かりの保育園は、子どもを預ける側からは安心だが、逆に保育士たちの負担も大きくなってくる。ハローワークでは、人手不足の分野である保育・看護・介護の福祉分野、建設・警備・運輸サービスなど、人手不足の分野を専門に扱う人材確保対策コーナーという窓口を設置している。子育て中の保育士自身も早朝勤務は難しいので、例えば定年を迎えた保育士や、子育てが一段落した保育士、資格の不要な保育補助を柔軟に雇用して、ひとつの保育所ではなく全体に広めていくと、子育て中の方が預けたいときに預けられて、安心して働けるような環境になると思う。

○吉田敬子議員

岩手県は保育所の夜間や休日保育が、少ないというよりも減っており、一時預かりできるところも本当にどんどん減っている。ただ国でも待機児童の関係で小規模の保育をふやしたが、これからは多様な選択肢をふやしていくことが大事だと改めて思った。子どもの成長段階に応じて、困りごとや、求めるサービスが変化する。不登校支援などに限らず、学校等が終わった後の居場所的なところ、本当にすべての子ども達においての居場所が必要である。学童の費用、高校、大学はさらにお金がかかるため、経済的な負担軽減が必要ということもそのとおりだと思う。ファミリーサポートセンター等の情報がどこにあるかわからないという意見もあった。せっかく制度があるので、情報発信をしっかりするように変わらなければならないと思う。

○高橋こうすけ議員

どうしても男社会というか、女性が子育てをしなきゃいけないというような風潮がある中、少しずつ男性育休などの制度もできていて、男性側の意識も変えていかなければならないと思う。育休以外で男性向けにどのような制度があるとよいか。

〔回答：鈴木さん〕

職場で育休を取得した男性職員の家族からの話だが、まずどのように役割分担をしたのか聞くと、お母さんが赤ちゃんの世話、お父さんは環境整備で、サッシの掃除や物置の片付けをしたとのこと。何のための育休なのかということで、いろいろと教育したことが思い出される。産後はお母

さんを休ませる必要があり、お母さんにしかできない授乳以外のこと、ほかの子のお世話や御飯の支度、送り迎えなどは全部お父さんがやると言ってもらわないといけない。

また、８時間働くと大変で時間が足りないからパートになりたいという職員がいたが、パートになると給料が減ってしまうので、時短勤務ができる条件を、子どもが３歳までから小学校入学前の６歳までとした。今度からは小学生まででもいいかと思っている。

まずは、子育ては女性の仕事という認識をなくしてほしい。そして、男性の教育、それからトップ層の教育が必要だと思う。県で職員向けに育休中はどういう家事育児をしなければならないのかというマニュアルを作成し、職場で８時間仕事をするように、家でどのような家事育児をしたのか報告書を提出させ、その分給料も出すというようにしてはどうか。国もお金の心配なく育休が取れると言っているように、まずは県でやり、それを市町村、民間と広めていけばいいと思う。

〔回答：川原さん〕

職場で子どもが生まれたあと自分の有給を使って休暇を取った方がいたが、やはり育休は勤務を休むので、取得すると給料が減るということを気にされていた。育児休業給付金も67％ぐらいで、今後はもう少し高くなるということだが、育休を取得した際の詳しい収入額がわかれば計画が立てやすくなるのではないか。例えば奥様が妊娠したことがわかったタイミングで、こういう制度があって、育休を取得するとあなたの場合はこのぐらいのお金がもらえますよ、という明確な金額を提示してもらえれば助かると思う。

〔回答：宮野さん〕

男性向けの制度ということだが、逆に女性がどうしてほしいと思っているかご存じか。女性はある程度子どもが生まれたらどうするかと勉強するが、父親は子育てに関して何も知らないと感じる。女性は子どもを産んだら、子育てをしなければならないので、育休で職場を休んだとしても休みではない。男性も育休をとったときにやれることはたくさんあると思う。

○高橋こうすけ議員

子どもがどう成長していくかということは正直わからないので、一緒に見ていくものかと思っている。お母さんには育休中に休みはないというのはそのとおりなので、例えば産後ケアやサポートができる宿泊型の施設など、お母さんが子どもを預けてしっかり休めるような制度をどんどん進めていきたいと思っている。

〔回答：宮野さん〕

子どもがどのように成長していくかわからないのであれば、それだけ勉強しなければならないのではないか。父親が仕事に行っている間に、母親が子育てをするということが定着しているというか、決まりきったことのようになっている。何も勉強しないのに、子育てをすることができるのかと感じる。赤ちゃんが生まれたら母乳やミルクをあげるという、そういう初歩から勉強できる場が父親にも必要ではないかと思う。父親も子育てを勉強して初めて、協力できることが見つけられるのではないか。妻が何を思っているのかわからない状況が家庭内にあるということは、夫は何もできない、ということに等しいのではないか。

男性が子育てを本当にわかっていないから、妻がやってほしいことを見つけられない。どう動いたらいいのかわからないから、子育てに手が出せない。母親は、赤ちゃんを抱っこしてもらっているだけで助かるのに、それすらできない。そういう人が育休だけ取っても何もできないと思う。

また、会話などのコミュニケーションを全然取らずに子育てをすることは無理だと思うので、ある程度の知識を持って、もっと奥様に聞いたらいいのではないか。

○小林正信議員

本日、皆さんからのさまざまな意見を聞いて、政治家は男が働いて、女性は家庭という固定観念からどうしても抜け切れないという感じで、私自身も変わっていかなきゃだめだと非常に感じた。

専業主婦になると孤立してしまって、どこにも相談できるところがなくて大変だから働きたいという声もある。例えば、お母さんが悩んだり苦しんだりしたときに支えてくれる相談先は、皆さんの時にはあったのか。ファミリーサポートの話も出たが、この間、自分自身、誰が来るかわからなくて不安という経験をしたところで、そういう心配から支援を受けられないかもしれないというところもあって、一歩踏み出せないお母さんをどのように支援できるのか、助けられるのかが課題だと考えている。

〔回答：佐々木さん〕

私の時は雫石町でサポートがあったので、そういう場所に行って話を聞いたり、同じように子育てをしている友人と話をしたりした。そういう方がいない場合、どうしただろうかいろいろ考えさせられた。私は子育てをして10年になるが、子育てをしていると、子どもをどうしようかとか、一緒に連れていけるものなのかなど、なかなか外に行きづらいということがある。今はサポートなども結構あると思うが、それを知らない人もたくさんいらっしゃると思うので、もう少しわかりやすく周知してもらえばいいかと思う。

○名須川晋議員

働き方というか、時短をされている、あるいは１時間だけでいいとか、託児施設を設けられているとか、こういう環境がやはり必要なのだと思った。社会の中でいろいろな考えがあり、変化があり、男性育休の中身も含めて見直していかなければいけないと思った。

本日の新聞の一面にもあったが、日本はどんどん人口減少が進み、2070年には8,700万人になるということで、率直なところ、働き方以外のところも含めて、どうすれば子どもを産める環境になると思うか。どのような施策が盛り込まれているといいと思うか。

〔回答：鈴木さん〕

結局はお金だと思う。子どもたち全員が大学に行けるように、自分のことは全部我慢して教育費を貯めなければいけない、というのが今の時代。大学、高校も無料で、今自分たちが稼いだお金は、今子どもと自分たちの楽しみ、例えば旅行に行くとか車を買うとか、家を綺麗にするのに使える、という時代が来れば子どもがふえると思う。

○名須川晋議員

私もまさにお金だと思う。その辺も含めて、いつまでも健康で働けるような社会や制度、環境をつくっていかなければいけないと思った。

◆　感想

○軽石義則議員

私自身も非常に耳が痛いというか、反省しなければならないことが多くあると実感した。私の妻も看護師だったが、子育てをしっかりしたいという思いで専業主婦を選択した。子育てが終われば復職も可能だという判断だったのではないかと思う。今は介護施設で働いているが、そういう選択をしていける道を残しておくことが大事で、鈴木さんもおっしゃっていたように、専門性や職業としての将来の不安を払拭できるかということが大切だと実感した。

子育てで男が何をしたのかと言われると、確かにネクタイを締めて運動会を見に行ってそのまま

会議に行ってというような暮らしだった。ある日突然、妻が子どもの運動会の写真を一切撮らなくなり、当時は忙しくてそんな暇はないと言っていたが、子どもたちが大人になってからもう一度聞いたら、子どもの成長を見たかったら自分の目で見るのが一番で、私はあなたに最高の宝物をいただいて感謝しています、と言われた。ともに子育てができる社会をつくっていくことが大事だと改めて実感した。

今の世代の皆さんは既に、お父さんが子どもを連れて地域の行事に参加するなど、取り組みを進めているし、料理などいわゆる家事の分担もしっかりしている。飲み会に誘っても、きょうは妻のかわりに夕食をつくらなければならないので、飲み会には行きませんとはっきり言えるような時代になってきている。そういうことが大事で、それをしっかりサポートできる制度を我々がしっかり支えていかなければならないと感じた。

子育ての場合は、私は母性と父性を確立していくことも一つの考え方という思いもあるので、きょうのお話を参考にしてさらに取り組んでいきたい。

○柳村一議員

私は娘が生まれたときに、妻の産後の肥立ちが悪く、トレーラーの運転手をやめて１年半ぐらい子育てをしたので、子育ての大変さは十分わかっている。お母さんが子育てできないとなると、お父さんは仕事をやめるしかない。それぐらい子育ては大変なこと。だから休みを取ったから、育児ができるとかそういうことではなくて、とにかく夫婦が仲よくなって、お互いに支え合っていくことがまず大事だと思う。

その後に介護現場で働いて、私が40歳ぐらいの時に、一緒に働いていた人に子どもが生まれたが、きょう御飯をつくらなきゃいけないから早く帰るよとか、男性の中でもそういう人たちがふえてきている、時代がよくなってきていると実感している。

ただ、男性が子育てをするという時代にはまだまだ来ていない部分もあるので、本日のお話を聞きながら、もっと男性が育児参入できるような仕組みづくりを考えていけたらと思った。

○高橋但馬議員

現在も子育て真っ最中で、それこそ子どもが生まれたばかりの時は、食事をつくったり、おむつ交換したり、お風呂に入れたりとかしていたが、男性の自己満足のところがあって、きょうの話を聞いて、うまく伝わっていなかったかもしれないことがわかった。

中学生の子どももいるが、住んでいるところの関係で、必ず送迎をしなければならないため、月曜日以外はなるべく飲み会を入れないようにして一生懸命やっている。

先ほど鈴木さんがおっしゃった男性の教育とトップの教育はすごくよくわかったし、その辺も私も議員の一人として何かしら貢献できればと思っているので、引き続き御指導をお願いしたい。

○畠山さん

貴重な時間を過ごさせていただいた。私自身、企業としてできることがまだまだあると感じた。男性の育休取得を促進して取得がふえているが、育休中にどのようなことをする予定なのかを聞くと、よくわかりませんと答える職員もいる。奥様が妊娠してから出産するまで約10か月間あり、その間何もしていなかったわけではないと思うが、いきなりお父さんになるような感覚の方もいるようだ。そういった意識を変えることから企業として取り組み、それを地域に広げていくことが地域の女性がもっと活発に働きやすい社会をつくっていくことにつながると感じた。新しい気づきや学びがたくさんあった。今後も引き続きそういった働き方について取り組んでいきたい。

○宮野さん

いろいろな制度のことを知ることができて、私ももうちょっと後の時代に育児をしていたら、もう少し楽だったのではないかと思うところもあった。皆さん同じように考えられていて、やはり同じように問題になっているのだと、すごく共感させていただいた。参加させていただけてよかった。

○川原さん

私も30代の今、実際に時短勤務をしたり、いろいろ行動を起こしたりすることによって、若い人たちもやってもいいんだとか、こういうことができるんだとわかってもらえるようにしていけたらいいと思う。常に勉強だと思って、きょうも参加させていただいたが、いい経験になった。

最後に言いたいことがある。土曜保育を利用するために働いている証明が必要だが、平日働いて土日に休みたいと思うときもあり、保育園だったら信頼できる方がいるので、安心して子どもを預けられるのではないかと思う。ただ、保育園の先生も休暇は必要なので、例えば１、２時間でもいいから、保育園を利用してサポートを受けられるというようなことができればいいと思う。

○佐々木さん

きょうは貴重な体験をさせていただいた。私自身もこれから企業でやっていく上で、いろいろと参考にさせていただきたい。やはり制度だけが先走りするのではなく、本当に必要なことをやっていただけたらと思うし、子育てする上で、本当に子どものために使えるような支援とかをこれから考えていただきたいと思う。

○鈴木さん

貴重な経験をさせていただいた。最後に一つお話したい。私は月１回、歯医者の集まりに参加するが、やはり男性社会で、先生たちが、うちの女の子が、という女性を下に見ているような言い方をする。うちの男の子は、とは普通言わない。せめてうちのスタッフがとか受付がと言ってほしい。

今のＳＤＧｓや多様性社会というのはとてもいいことで、先ほど規制と助成というお話があったが、一人親がふえていて、うちのスタッフでもすごく多い。そういう家庭で育った子どもたちが社会に出ていく時に、女の子はさあ、というような社会でなくなってほしい、そういうパターンにしたくないので、呼び方にはぜひ気をつけていただきたい。

○楢木さん

就職して、スキルが上がってきた時に出産退職を繰り返してきたというお話があり、それはしっかり働いてキャリアを積んでいきたい本人にとっても、その会社、事業所にとっても本当に残念なことなので、しっかりキャリアを積んで働き続けていきたいという人については、出産や育児の時でもやめずに働き続けられるような環境があればよいと思う。子育てを優先したいので、子どもが小さいうちはパートで働きたいという方も多くいらっしゃるので、そういった方々に対しては宮野さんのところみたいに、お子さんに何かあったら休んでいいよ、働くのは１時間でもいいよというような、そういう理解がある会社とかがふえていくとすごくありがたいと思う。何かあった時に休みやすい環境や、男性でも女性でも育休の取りやすい環境が大事で、育休を取ると残された方の業務の負担が大きくなってくるので、バックアップや応援体制が必要と感じた。きょう皆さんからいろいろなお話を聞かせていただいてとても参考になったので、職場に戻ってからも周りの人に伝えていきたいと思う。

○米内紘正議員

本日は本当に、大変濃い話し合いができて、御意見も頂戴できたと思う。特に男性の子育ての関わ

り方、そのあり方について、世代間で、その価値観の差というかジェネレーションギャップがあるかと思う。多分、20代、30代ぐらいの我々の父親世代は、あまり子育てにかかわっていなくて、お父さんが子育てをしている姿を見ていないので、お父さん同士で子育てトークをしても、あまりわからないという話になる。そういう意味でいうと、今この過渡期にある中で、啓発活動、男性側の教育が本当に必要だと思う。世間の流れの中でそれが私たちの世代に繋がっていくのだろうと強く感じて、またそこに行政のあり方というのも重要になってくると感じたところ。

本日頂いた御意見・御提言は全議員で情報共有して議会活動に活かしていく。

お忙しいところ御参加いただいたことに感謝を申し上げ、閉会とさせていただく。